# ARTICLE FROM THE ASAHI NEWSPAPER (Circulation: 8,000,000) April 19, 2010

### CAROLE KING & JAMES TAYLOR SONGS FROM THE 70'S CONTINUALLY SHINING

I was able to catch veteran singer-songwriters Carole King and James Taylor joining together for their Troubadour Reunion Tour at the Budokan on the 14<sup>th</sup>. The first time the two performed together at the legendary Troubadour Club in LA was in 1970. For this tour, which commemorates the 40<sup>th</sup> anniversary of that show, they brought along top-notch musicians including the original "Section". Both artists join the band, with Taylor playing his acoustic guitar and King on the piano. When Taylor sang, King served as his pianist, and when King took the vocals, Taylor was her guitarist. Both remained on stage the entire show as musicians. The intimacy between the two old friends was heart warming.

The setlist consisted mainly of songs released by King and Taylor in the early 70's, however in no way did it feel dated. In the days before sampling and drum machines, the natural sound made from a simple configuration of live instruments gently caressing the singer, continues to shine strongly after 40 years. The refined city sound and the idyllic feel interlock perfectly. King and Taylor sang the songs they wrote when they were younger with a deep interpretation only made possible through maturity. Their eloquent emcee and relaxed presence also left a strong impression.

The early 70's when the two artists came into the spotlight, was a time of disillusioned youths trapped in resignation and frustration. The 60's and its passionate revolt against war was a thing of the past. At such a time, King and Taylor's introspective voices permeated deeply into the people's hearts. Today as we constantly find ourselves hitting walls politically, culturally and in many other areas, I feel it is quite symbolic that King and Taylor's voices once again hold such a strong presence.

Kenta Hagiwara

## ない」述い吐露

· MZ 扱が同

という NSIM 常識に に進め MARIA じいも うも無 ELADAI

ALSIN

だが、談志が「これが最後」という のはこれが最初ではない。この数年の 決まり文句でもある。

「選挙屋みたいなもんでね、『最後 のお願い』『最後の最後』『本当に最 後』って。あれとおんなじ」

談志は晦年の古今亭志ん生を「噺が できなくても、高座にいてくれるだけ でいいんです」と口説いたことがある という。「そしたら、いつの間にか自 分がそんなことを言われるようになっ てる。でも、それじゃ上野に来て西郷 さんの銅像を見ただけで膨動してる人

#### 「中国ロックの父」再び、単健、15年ぶり来日公演

「中国ロックの父」と呼ばれる 崔健(ツイ・ジェン)=写真=が に年ぶりに来日公寓を開く。

崔建は1961年生まれ。 8年 にしゃがれた声でビートに乗せて 歌う「一無所有」 (俺には何もな い)を発表して一躍人気となり、 中国にロックの時代をひらいた。



苦音たちの熱狂的な支持を受けた ため、天安門事件前後には大規模 なコンサートが開けない時期もあ UNO

い年には東京・日本武道館など でのコンサートにも出演。来日は それ以来だ。新鋭バンド「瓊人薬 隊」もゲストで登場する。

5月7日午後6時半開演、埼玉 県川口市・リリアメインホール。 問い合わせは電話000・648 る・6425(富川エンタープラ

#### シカー

術と荒々しさが要求される。 Iを設したいほど憎んだ」 、ノを専攻した高校時代、「試 ンテストで劣等生に振り分け 自信を失った」。だが、チェ 1の即興を含めた自由な奏法と に出会って魅せられ、東京芸大 、エンバロを専攻。ピアノは弾 D聴くのも毛嫌いしていたが、 チェンバロのアルバムが出来 3と、ピアノ的な音がちりばめ **こることに気づいた。「劣等** いつの間にか克服できていた」 フンダ在住だが、京都にも家を 行き来して活動する。「いろ 作曲家の埋もれた良い曲に光を たい」。それが、ゆうゆうと 異一する彼女の静かな野心だ。 (华下真理机)



# NO け 40

ステージ

#### キャロル・キング&ジェームズ・テイラー

米国のベテラン・シンガー・ン ングライダー、キャロル・キング とジェームズ・ティラーがタッグ を組んだ「トゥルバドール・リユ ニオン・ツアー」の東京公領初 日、

は日の日本

広道館の
ステージ を見た。ロサンゼルスのを舗ライ ブハウス「トゥルバドール」でる 人が初共頂したのが1970年。 その

の

関

年

記

念

ツ

ア

ー

だ

け

に

、

バ ックには当時彼らを支えたザ・セ クションのメンバーを核とする腕 ききが勢ぞろい。そこに生ギター を抱えたテイラーとピアノを奏で るキングが加わる。ティラーが歌 うときはキングがピアニスト、キ



キャロラ・ナング(相) とジェームズ・ティラー

ングが歌うときはティラーがギタ リスト。彼らは常にバンドの一員 として舞台上にいた。旧友同士な らではの一体感が心地よかった。

披露されたのはほとんどの年代 前半にティラーとキング各々が発 表した楽曲群。にもかかわらず古 さはない。打ち込みもサンプリン グもなかったころ、生楽器中心の 簡素な編成で歌い手の心にそっと 寄り添うように構築されたナチュ ラルな音像は、

い年の歳月を経た 今もなお色あせぬ輝きを放ち続け ていた。 洗練された都会の味と牧 歌的な手触りが絶妙に交錯。かつ て若き日に作った楽曲を、今改め て、圧齢を重ねたなりの深まった 表現で聞かせるテイラーとキング の巧みな語り口とリラックスした たたずまいも印象的だった。

彼らが一躍注目を集めた
化年代 初頭は、あきらめと挫折感に支配 されたシラケ気分が若者に愛延し 始めた時期。反戦運動などで熱く 然えた敗動のの年代もすでに記憶 の彼方に。そんな中、彼らの内省 的な歌声が静かにしみわたってい ったわけだが。政治的にも文化的 にも、あらゆる面で行き詰まり感 を拭いきれない現在、彼らの歌声 がふたたび存在感を発揮し始めた ことは、なんとも象徴的な気がす